

高経年団地におけるコミュニティ支援方策検討のための実証実験「あけぼのテラス」

公的集合住宅団地の集約化手法に関する研究 その3

集約化	公的集合住宅団地	地域活動
共用空間	コミュニティデザイン	実証実験

正会員	○ 藪谷 祐介*
同	山田 信博**
同	林 匡宏***

1. 研究の背景と目的

公的集合住宅団地の集会所やオープンスペース等の共用空間は、団地コミュニティの形成に多面的に関わってきた。しかし、近年では少子高齢化、コミュニティ弱体化により共用空間利活用の担い手不足が指摘されている¹⁾。UR都市機構では団地コミュニティの形成を目的に、居住者が自主運営することを前提とした共同花壇を整備した事例も見られるが、自主運営組織を発足したにも関わらず、後に頓挫して運営組織が解散した事例も報告されている²⁾。このように、団地はコミュニティ形成の基盤となる空間資源を有するにも関わらず、その一部では担い手不足を理由に効果的に利活用されていない。このことは、コミュニティ運営力が低下する高経年団地ではさらに深刻化すると推察される。

筆者らはこれまで、集約化が計画されているURあけぼの団地(札幌市)を対象にコミュニティ支援方策検討のための基礎調査を行ってきた。2017年に実施したアンケート調査³⁾では、地域活動が広く開かれていないことや情報不足の理由により、参加したいができていない団地居住者が一定数存在すること、企画・運営に携わりたい団地居住者は全回答者の1%にとどまり、共用空間活用の担い手が不足していることを明らかにした。さらに団地居住者へのヒアリング調査より、オープンスペースは自治会活動以外で使用して良いか分からないため、実質活用している人がいないことが明らかとなった。しかしながら、集会所とそれに隣接するオープンスペースの連続性は、活動の視認性を保ち、用途の多様性を確保できるため、開かれたネットワークを構築するコミュニティ活動に有効である⁴⁾。そこで本研究では、開かれたコミュニティ活動のプログラム開発と担い手育成に向けて、集会所とその周辺のオープンスペースを活用した第1回実証実験「あけぼのテラス」を2018年9月に実施した(写真1)。これは、外部の専門家(筆者ら)が団地の潜在的ニーズを鑑みて未来の姿を創造し、それを団地居住者と体験的に共有するための試みでもある。本稿ではその概要と実施結果の報告をする。

2. UR あけぼの団地の概要

URあけぼの団地は、1963～1967年に日本住宅公団によって開発されたRC5階建ての集合住宅団地で、棟数が32棟、住宅戸数1240戸である(図1)。高齢化率は49.4%、空き家数は397戸(空き家率32.0%)である。アンケート調査(有効回答数201)³⁾によると団地居住者が近隣で利用したいサービス(選択式・複数回答可)は、図書館、朝市、コミュニティ・カフェ、健康相談が上位に挙



写真1 実証実験「あけぼのテラス」

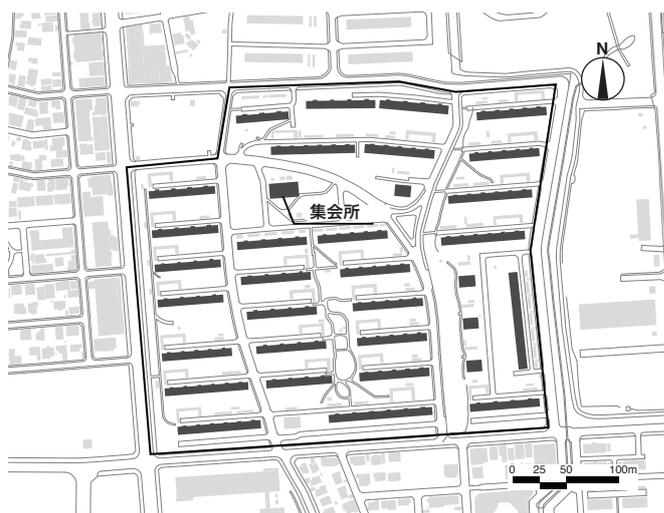


図1 あけぼの団地の配置図

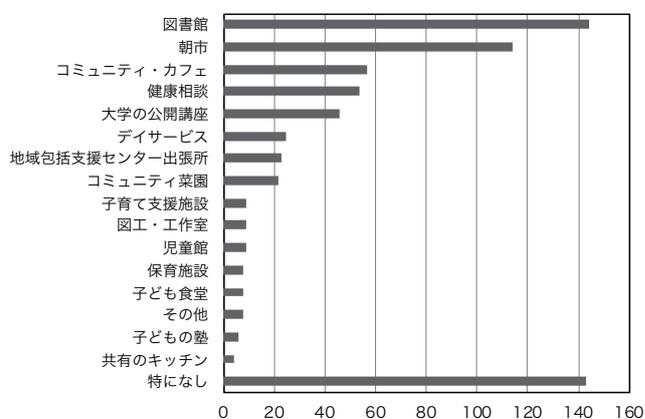


図2 団地居住者が近隣で利用したいサービス

Report on Demonstration “Akebono Terrace” to Consider Measures to Support the Community in Aged Apartment Complex – Study on Integration Method of Public Apartment Complex Part3

YABUTANI Yusuke, YAMADA Nobuhiro, HAYASHI Masahiro

げられた。それ以外にも、団地居住者へのヒアリング調査では選択肢以外に美容院が挙げられた。

3. 実証実験「あけぼのテラス」の概要

2018年9月29日(土)、30日(日)の2日間実施した。時間は両日とも10:00-16:00の6時間、天候は29日が晴れ、30日が曇時々雨であった。告知は団地の全住戸に対してチラシをポストイングし、SNSでも発信した。実施プログラムは表1の通りで、これらはアンケート調査(図2)とヒアリング調査の結果をもとに決定した。ただし、「出張!まちの健康応援室」と「野菜販売」は運営主体の都合上、30日のみ実施した。場所は集会所およびその周辺のオープンスペースとした(図3)。コンテナをオープンスペースに配置し、屋外のプログラムはテントを使用した。人の居場所となる空間には人工芝を敷き、また道南杉を活用したオリジナル木箱「あけぼこ」を開発し、テーブル、椅子、本箱、ディスプレイ棚として使用した。

4. 実施結果

参加者は29日が50名、30日が59名、両日合わせると109名であった。約800世帯の居住者がいることを考えると参加者はそれほど多くないが、複数のプログラムに参加する人や長時間滞在する人がいて常時誰かがいる状態であった。中にはお酒を持ってきて宴会を始める高齢者や駄菓子屋に居座る子どもがいた。今回は団地外には積極的に告知をしなかったが、団地内住んでいる家族から情報を得て参加した方も見られ、団地周辺居住者も含めたコミュニティ形成の可能性が示唆された。また、運営協力をしてくれた団地居住者からは、普段自治会活動等に参加しない方が参加していたという意見もあった。

5. まとめ

本稿では団地の共用空間を活用した実証実験「あけぼのテラス」の実施結果を報告した。次稿では、参加者に実施

したアンケート調査の結果を報告し、共用空間活用の可能性を検討する。

参考文献

- 1) 佐土原洋平, 他: 公営住宅行政における住民自主管理とコミュニティ活動の支援施策に関する調査研究, 日本建築学会計画系論文集, 第81巻, 第723号, pp.1185-1194, 2016.
- 2) 水野優子: 団地居住者による共用空間マネジメントの可能性 - 公的賃貸住宅の共用施設を事例に, 武庫川女子大紀要, Vol.59, pp.115-124, 2011.
- 3) 藪谷祐介, 山田信博: 高齢年団地における居住者の地域活動への参加特性, 公的集合住宅団地の集約化手法に関する研究 その2, 日本建築学会学術講演梗概集 2018 (建築計画), pp.1381-1382, 2018.9.
- 4) 篠原聡子: 赤羽台団地の共用空間と居住者ネットワーク, 国立歴史民俗博物館研究報告, 第171集, pp.65-80, 2011

表1 実施プログラム別参加人数

プログラム	運営主体	場所	参加人数(人)		
			29日	30日	計
出張美容院	アロハ(美容師グループ)	集会所内	9	7	16
出張!まちの健康応援室	札幌市立大学まちの健康応援室		-	23	23
あけぼのカフェテラス	1日目・東海大学学生 2日目・団地住民+札幌市立大学学生	コンテナ内	55	50	105
ピザ窯で焼きたてピザ	野菜BALマハロ(民間)+札幌市立大学学生	屋外	26	27	53
野菜販売	ベジ子(個人)		-	43	43
駄菓子販売	Commons fun+札幌市立大学学生		11	28	39
木箱づくりワークショップ	札幌市立大学学生		7	9	16
図書コーナー			-	-	-
計			108	187	295
参加者(会場でカウント)			50	59	109

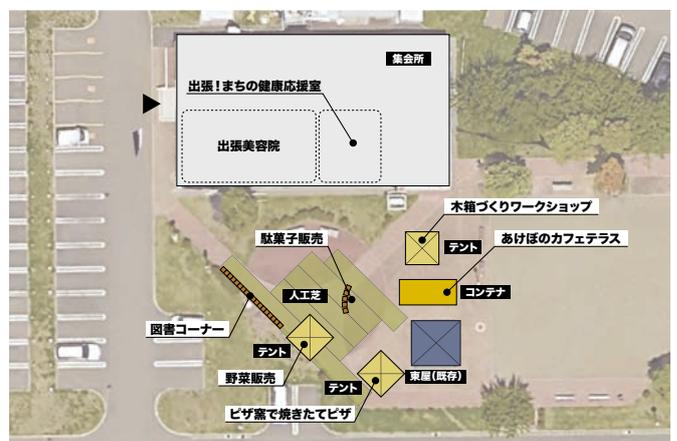


図3 あけぼのテラス配置計画



写真2 出張美容院



写真3 出張!まちの健康応援室



写真4 あけぼのカフェテラス



写真5 ピザ窯で焼きたてピザ



写真6 野菜販売



写真7 図書コーナー

* 富山大学芸術文化学部 講師・修士(デザイン学)
 ** 札幌市立大学デザイン学部 准教授・博士(学術)
 *** Commons fun 代表・博士(デザイン学)

*Senior Assist. Prof., Faculty of Art and Design, Univ. of Toyama, M. design
 **Associate Prof., School of Design, Sapporo City Univ., Ph.D.
 ***President, Commons fun, Ph.D. in Design